



フォトジャーナリスト

宇田 有三

「罫」にそっと触れてみると一つが物言わぬ証人た
る。何かで殴られた痕なの
ち。
だろうか、右の側頭部が陥
没している。
初めてカンボジアを訪れ
たのは二〇〇〇年十一月。
ここは、首都プノンペン市
内に建つ「トゥールスレン
虐殺博物館」。伝え聞いて
いた通り、虐殺された犠牲
者の罫を使つて、カンボ
ジアの地図が作製・展示さ
れていた(現在は撤去済)。
何も語るこのできな
い、しゃれこうべ群。男か
女か、老人か若者かも分か
らない。だが、それらのひ

自分の取材範囲外である
カンボジアを訪れたのは、

物言わぬ証言者



「必然的に…三〇〇万以
上ものカンボジア人がなさ
れるまま受動的に死に至っ
たと考えるのは明らかにま
ちがいである」

人々は無抵抗のままに殺
された訳ではなかった。抵
抗した人たちはやはりい
た。だからこそあれだけの
拷問があったのかもしれない。
加害者と被害者がいま
だに同居する、ジレンマの
国カンボジアは回復途上。

どこの国でも、歴史検証
は難しい作業。被害者だと
思っていたら、加害者にな
るかもしれない。検証しよ
うとしたら、後世に残って
いたのは、時の政府中心の
「強者の歴史」では話にな
らない。

事には限りがある。だが最
低限、あの時代は何だった
のか、現場の空気を吸いな
らう、何かヒントを得たか
ら、
罫の眼窩をのぞき込
む。この人たちはどんな歴
史を残してほしかったの
か。物言わぬ証言者たちか
らは、想像を膨らませるし
かない。

ボル・ポト時代(一九七五
年)の大虐殺とは何
「どうしてあれだけ多く
の人びとが無抵抗に殺され
てしまったのですか」
納得のいく答えが返って
った。
現地では援助活動が続ける
日本住宅に身を寄せた。そ
史を残してほしかったの
か。物言わぬ証言者たちか
らは、想像を膨らませるし
かない。